

## ベップ・アート・マンス 2010 参加企画

「混浴 “学生” 世界～学生による、学生のためのフォーラム～」

### 2 日目「コミュニティとアート」フロア議論

2010 年 11 月 4 日（木） 於 platform01（別府市元町 8-3）

#### 司会

平井 あゆみ（神戸大学国際文化学部 4 年生1）

#### 発表者

橋本 みなみ（神戸大学国際文化学部 4 年生）

「<アートプロジェクト>と<地域活性化>の関係性を模索する

—瀬戸内国際芸術祭 2010 を事例として、ボランティアの視座より」

橋本 麻希（神戸大学大学院国際文化学研究科 博士前期課程）

「コミュニティ・アートにおける継続性についての考察

—夢のたねプロジェクト、音遊びの会を事例として」

林 宏美（滋賀県立大学大学院人間文化学研究科 博士前期課程）

「石山アートプロジェクト—まちを再発見し、活用するためのアート」

#### コミュニティ・「アート」である必然性～目的としてのアートと手段としてのアート

山出<sup>2</sup>: 発表の中で、コミュニティ・アートの定義がありました。もともとはイギリスで定義されていますが、ここでいうコミュニティ・アートというのと、プロジェクト、地域の中で展開していくアート、つまり、ホワイトキューブの中にあるアートではなく多くの関わり方があるアートとの違いが、よくわからなかったです。地域とかコミュニティの人と関わりながらやっていくプロジェクトの問題点をどのように考えていくのかが聞きたかったです。

例えば、アートという存在があります。アートが持っている可能性と、他の分野が持っている可能性が違ふとします。人と人が出会って新たなコミュニケーションが誘発されたということがアートでなければならないのか、他に理由があるのかを見極める必要があると思います。いろんな人との関わりの中でアートをつくらうとしている人がいます。たとえば、一つの作品に完結させようとするタ

イプのアーティストもいれば、そうでないタイプのアーティストもいます。コミュニケーションを誘発する場をつくるのか、コミュニケーションが誘発されて作品に結びついていくのか。こういうことが地域の中で展開されていくことでどうなるのか、つまり、目的としてアートがあるのか、アートという可能性や手法があって、新たに何かをつなごうとしているのかというのは、大きく違います。音楽を作ろうとしているのか、音というものの可能性からもっと違う世界を追求しようとしているのか。

これは、フィールドの話だけではなくて、どこに持っていくのかという話にもなると思います。難しい課題ですが、アートでなくてはならないのであれば、それは何故なのかというところを、そこを語らないと瀬戸内国際芸術祭にしても、あいちトリエンナーレにしても、あんまり意味がないと思います。色々な人が集まってコミュニケーションが取れていますというのはコミュニティ・アートでなくても、道端でも市場でもいい。そこが目的

なのか、そこにアートが入ることによって何が生まれるのか。今日のプレゼンテーションで報告してくれたのは一つの事例ですが、それはアートでなければならないのかというところは難しいと思います。例えば、別府で行われていることもなぜアートなのか。まちづくりと言っはいけないのはなぜなのかというところを、常に僕は問われています。なぜアートなのか。アートでなくてはならなかったのかということです。まちづくりに終わる、コミュニティ内の関係をよくするためだけに終わる…そうではなくて、アートとしての性質を見極める必要があると思います。

林：アートは手段なのか目的なのかということ私の体験から考えたときに、石山で作ったアートは、最初、手段だったと思います。コミュニケーションを誘発するとか、コミュニケーションを視覚化するという言葉を使っていました。でも、活動を続けるうちに、だんだんと「まち」のことを知るようになり、手段ではなく目的としての部分を持つようになってきたのではないかと感じています。まちを記録するとか、まちを発信することにアートが結びついていったと思います。コンセプトとして最初に何を作るのかということを出しておく必要はあると思いますが、まちというのは様々な要素が含まれて成り立っているものなので、だんだん変化していくことがあってもいいと思います。

山出：変化していくことがあってもいいと思うけど、今、アートが目的になってきたといったけれど、「アート」って何なのか。「私が作るもの」がアートなのかかもしれないし、それが何なのか。広い定義の基にアートというものがある、それを作っていくということに対しては、自分の中に目的があるんだけど、そこだと思います。

林：アートを作るということに携わった人は、

アートを作るという目的を持っているということを感じていると思います。でも、そういうプロジェクトがまちの中にあるということは、アートを実際には作らない人もいるということです。そういった人がアートを作るプロジェクトに対してどのような目的を持つのかということ、まちづくりだと考える人もいると思います。

一方で、私は石山<sup>3</sup>では、「まちづくり」という言葉と「地域活性化」という言葉は絶対に言わないようにしていました。その理由は、私がフィールドとしている商店街で地域活性化というと、必ず地域経済活性化に結びついていくと思ったからです。こういったことは、結果として経済的な効果があるかもしれないけれど、経済的効果がない場合もあると思います。そういったときに、コンセプトとして地域経済活性化を挙げると、結果が出ない場合に失敗したということになってしまうと思います。

地域経済活性化に失敗したか成功したかをプロジェクトの評価基準にするとか、アートを作ることそのものを目的にするのではなくて、まちにもう一度目を向ける、再発見してみるのがまちの中にアートを入れるということにおいて大事な側面ではないかと思っています。まちの中にアートを入れるときには、そこで作られたものをアートであるのか否かを定義するのは、必ずしも議論すべきことなのかな、と思っています。コミュニティとアートというセッションで、こういったことを言うのもどうかなと思いますが・・・。

山出：考え方の問題じゃないかな。視点の違いというか。どちら側の視点なのか。アートを作ることで人が出会うというのも重要な解なのかもしれないけれど、そこをマネジメントするんだと思う。アートは作られることによってどうなっていくのかが重要です。それを享受する人にとっては、アートなのかどうかはどちらでもよくなるんじゃないかな。

林：地域のことを話すときに、「土の人と風の人」という言葉をよく使います。風の人というのは、その土地には住んでいないけれど、石山のようなプロジェクトをやってみる人。土の人はそこに住んでいる人。風の人には、プロジェクトを運営するためにコンセプトや定義というのが必要になると思います。でも、結局はまちでの出来事は、土の人がどのように受け取るのか、新たな出来事を存続させるのか、更新させるのか、或いは、止めてしまうのかだと思います。アートなのかどうかというの、土の人の定義になっていくのではないかと思います。

#### 言葉の意味を掘り下げ、その本質を探る

芹沢<sup>4</sup>：折角学生なんだから、本質的なこと、まあ、青臭い議論を避けないでやらないとだめだよ。こういうことを真剣に話す人がアーティストになる。社会に出るとこういうことを議論するとか、疑問を持って考え直してみるというのがなかなかできなくなる。

今回発表した3人は、みんな最初のところに、普通は無批判で使ってしまうコミュニティとかアートとか、プロジェクトという話をしてますよね。きちっとした定義を書くとなると、書いたらいいと思うけど、困ったときは大本に戻るというのが必要です。自分が受け入れるのか、受け入れないのかは置いといて。そもそもの言葉の意味というのを頭の中で考えた方がいい。コミュニティとかアートとかは、何なのか。アートって便利な言葉ですよ。山出さんが言ってるアートとここでみんなが使ってるアートというのが、違うかもしれない。アートを動詞的に使ってる人もいれば、名詞的に使ってる人もいる。

アートワーク、つまり、作品として重要視している人もいる。同じ言葉なのに、動的だったり、静的だったり。さっきも出たけど、手段と目的というのももう一度考え直したほうがいいと思う。動的に捉えるときに、すぐにみんな原因と結果という言葉を使うけど、

歴史とかで考えると、原因と結果ではみることができない。プロセス重視で考えると、つまり、誰かが誰かに挑戦したっていう繰り返して歴史を見ると、直線的にこれが原因でこれが結果だっていうけど、そうじゃないときもある。もう一回ものの意味というところを考えてみるのが必要だと思う。考えるというのは時間が必要だから、学生のうちに各自やってみたらいいと思う。

橋本みなみさんの発表で「術」という言葉を使っていたよね。あれはいいと思います。術という字の成り立ちを調べてみたことがあったんだけど、「術」というのは、「行」というのがもとになっていて、これは十字路を表すらしいです。十字路にはいろんなものが流入してくる。魔物かもしれない。「術」の真ん中にある「朮」は、霊力をもった呪術的な動物で、術とはこの動物で十字路をお祓いすることだ。芸術という言葉も簡単に使っているけど、その中には呪術性があるんじゃないかと思います。議論のための議論になると、すれ違うこともあって面倒くさいけれど、こうした青臭い議論も必要だと思います。

#### 社会科学的な観点からアートの意義を説明するという近年の潮流について

佐口<sup>5</sup>：私もアートイベントについて、修士論文で取り上げようと思っているのですが、イベントとかプロジェクトとかで、成功したかどうかは、目的が達成できたかどうかだと思います。目的とは何かを考えたときに、主催者側が目的を達成できたと思ったら成功なのか、という点はすごく難しいと思います。そこに関わってきた住民とかボランティアの人が、主催者の目的を知っていた上で、目的が達成できたと思ったら成功だといえるのではないかと思います。なぜアートなのかということにもつながりますが、社会的価値と文化的価値、経済的価値から、成功か否かを評価できるのではないかと考えている人がいます。アートを用いるという点では文化的価

値が必要だけれど、まちで展開する点で社会的価値を見出さなければ意味がないということ仰っています。この両方を考える必要があるのかなと、みなさんの話を聞いていて思いました。

藤野<sup>6</sup>: 社会科学的な目でアートを囲い込むとか、見ようとする動きが大変進んでいますよね。文化的・社会的・経済的価値っていうので評価するとわかりやすいですよね。僕もそういうことで説明しないとイケないときがあります。でも、もともとは哲学をやった人間だから、アートの計画を立案して、目的を掲げてそれを達成してということは、考えてもみないことですよ。その評価もね。

実存主義というのがはあったときがありました。ご飯を食べて生存するという、生きて愛して死ぬというセグメントは 70 年なのか 80 年なのかわからないけれど、それが一瞬にして絵画のように、シンフォニーのように 3 時間のオペラのように一気にパースペクティブな目線から見える、想像できるというのがあるということが、アートにおいてかけがえのないことです。そこにアートの普遍的な価値があると思います。僕は、そういう環境が整っていたわけではないけれど、物心のついた比較的早い時期にそういうことを体験しています。

こういうことを言うとアート教育みたいになりますが、市民に対してもこういう普遍的なアート教育ということが必要ではないかと思えます。こういう議論はだんだん避けようという雰囲気にあります。僕自身もこういう議論を学生がしたがらないので、面倒臭くなっちゃうときがありますけれど。社会科学の囲い込み、枠組みでアートを捉えようとするのが悪い転換になっているのではないのかと思うときが 49 パーセントくらいあります。残りの 51 パーセントは、そういうことを言うと進まないから、説明のために経済学や数字を使ったり、政策科学的なことを言わな

いとイケないと思っています。自分の中ではいつも闘ぎあいになっています。

自律性のことだったり、道具主義というのは、ヨーロッパでも文化政策的な話の時には必ず大きなテーマになります。日本でもそういう傾向があります。でも、圧倒的に地域経済活性化や教育というところで語られることが主流になっています。僕の仲間の中で美学や哲学をやってきた人の中でアートマネジメントや文化政策、まちづくりに関心があるかという、全く関心がありません。日本ではそういうことは隔絶していて、アンタッチャブルな状況です。僕は、そういう仲間から見ると完全に墮落した人間に見えるわけです。僕は、それで構わないですけど、とても悲劇的なことだと思います。学問的な、アカデミックなバイアスというのがあって、美に関わることが特権階級のものになってきたという。そういうことを経済や、ましてや地域活性化に結びつけるとは何事だというのが…美学をやっている人やアーティストの中にはそういう人がいますよね。日本の美学というのは、学問としては 150 年くらいになりますけれど、これまでになかった時代に入っているのかなと思います。

吉本<sup>7</sup>: 発表をほとんど聞かずに発言するのは、申し訳ないと思いますが、経済的效果とかそういう話が出ましたよね。うちの研究所でも、劇場運営に伴う経済効果を計算してくださいというお願いがよくあります。仕事として対応しますが、本当のところはあまりお勧めしません。劇場は経済効果をもたらすために存在しているわけではありませんから。藤野先生がおっしゃったように、人生の上でかけがえのない芸術的体験をするためにあるんです。でも、経済効果を計算すると、経済効果をもたらすために劇場があると錯覚することになるから、経済効果を計算するのはやめたほうがいいと思うんです。でも、現場の人もそういうことはわかっているけれど、財政当局は

数字がないとわかってくれないと言うわけです。

僕が最近考えているのは、こんなに大きな経済効果がありますよ、ということを手で話せばいいと思っています。その上で、実際にアートに携わる人が、目的を間違えずにちゃんと事業をやればいいわけです。昨日、芸術を教育の中で取り上げるときに、芸術をやっていると英語や数学の点数が高いという話をしましたよね。あの話、自分自身はとても危険だと思っています。国語や算数の点数を上げるために芸術をやっているわけではなく、それ以上に子どもたちは得るものがあるわけです。本当はそっちの方が重要だけど、保護者に説明するときに、芸術の授業にはこういう効果があるという話をする方が、スムーズに受け入れられることがあります。手段と目的という話がありますが、手段に使うふりをして、こちらはこちらの目的を達成すると思ったほうがいいと思います。ずるいと言う人もいるかもしれないけれど。

藤野：僕もその意見に賛成です。僕は、そうやって手段と方法をすり替えて話ができるけれど、できない人もいますよね。逃げちゃう人もいますし。そうなると間違った思考形態というか、悪い状況を与えてしまうかもしれない。

#### **アーティストの役割とマネジメントの役割**

山出：マネジメントとかつなぎ手の問題がありますよね。アーティストは経済効果を考えて作品を作るな、ということです。アーティストがかけがえのない体験をつくる時、そこには経済効果とか、どのような変化が社会に現れるのか考えてやっているわけではなく、絶対的にこれをつくりたい、見たいということを考えてやるわけです。だから、僕たちにかげがえのない経験を与えてくれるわけです。それをしっかりわかった上で、社会との回路をつくって参加をしてもらう、感じて

もらうという場をつくる必要がありますよね。町なかなのか、劇場なのかというのもありますけど。その中で色々な手法が生まれると思います。経済的な効果というのは、難しいし、危険なんだけど、自分の立場を明確にした上でやるしかないと思います。

佐口：まちづくりという面からアートプロジェクトを考える危険性が存在していると思います。アーティストとしての表現が、まちづくりというキーワードを出すことで制限されてしまうと思います。また、こういう風にするともまちづくりとして成功しますと明言してしまうと、同じようなプロジェクトが増えてしまうと思います。プロジェクトが同一化するということ危険性です。

山出：マネジメントする側の人間の立場がぶれないことが、やはり大事です。何を言っても伝わらないことがあるんです。でも、それを手を変え、品を変え、話すことが大事なんです。そのためには、自分が本質的で圧倒的なアート体験をしているか、していないかが重要なんです。そういう体験をしていないのに、マネジメントをしようとする、アートマネジメントが必要なのかということは理論的なことでしかわからない。問題が起こるといって、ぎりぎりの状況になったときに、アートの力を信じていることができるのか、できないのかということなんです。

僕も自分の目的を達成するためには、方便も言います。マネジメントする側の立場が明確でも、たとえば行政に説明するとすると、行政の人がその上の人に同じように説明するんです。すると、上の方はそれを真に受けちゃうんです。そういう状況になると、上から何か言われたとき、自分の立場が明確になっていないと、それをそのまま受け入れてしまうんです。すると、これだけの経済効果が必要で、政策的にこれだけのことを達成しないといけないということになるんです。マネ

ジメントする側の人間は方便で言ったのに、行政からは自分が言ったんだと言われて、だんだん目的がわからなくなってしまうことになる。行政側の人の多くは、アートで感動した体験がないから本当の信頼関係を結ぶのが難しいというか、手段と目的が入れ変わって、都合のいいように変化してしまう危険性があると思います。

実際には、心を動かされるアートをつくるのは難しいです。ピカソがその辺の道を歩いていることなんてないですからね。心を動かすアートに出会うのは奇跡に近いことですが、出会うときには出会います。でも、アートマネジメントという職に将来就こうと思っているなら、そういうアートに出会ってないダメですよ。方便で何か言わないといけないときにも、自分の立場を明確できるのは、そういう体験があるという根本に戻れるか戻れないかだと思います。そういう体験をしていないと、よっぽど理論的な強さがないと難しいですよ。でも、人間は状況によって左右されますよね。

### 再びコミュニティ・「アート」である必然性について

平井：今までのお話の中で、生死の問題としてのアート、言葉にできない出会いとしてのアートというのがありました。でも、実際には、現在アートだと定義されていないものの中に、こうしたアートがあるかもしれません。まちづくりの中でアートが使われてしまっているという話もありましたが、林さんの発表を聞いていると、まちづくりの中に含まれているアートを体験するという瞬間に目を向けると、まちづくりという文脈の中で語られるアートは危険だという議論はできなくなってくるのではないかと考えています。

芹沢：今の話は、全くの真実なんだけど、アートマネジメントという分野ではなぜアートなのかという話は必ず出てくると思います。

アートという概念をどこまで広げるのかということを見ると、そういう議論はしても構わないと思う。僕も美術館にあるものだけがアートだとは思っていないし。でも、心を震わせる瞬間というのが必ずあって、そこに議論が戻っていくと思う。なぜ、アートなのかという基本に戻る、そういう疑問に立ち返ることがないと難しいときがあると思うな。

### マネジメントする人に不可欠な「私にとってのアート」

山出：私にとってのアートという話をしないと、伝わらないことがあると思います。自分たちの活動を評価する上でも、そういう原点が必要になる。何度も議論して確認しないとけないという、自身の反省があります。芹沢さんが言うように、見て感じて、現場というものを見ていく、それしかないと思います。最後に一言。昨日、吉本さんが、どうしてこの世界に入ったのか、という話をされていたので、少しだけ話します。

僕は、アーティストとして20年くらい仕事をしてきました。一番最初にアートを意識したのは高校2年生のときです。それまではアートというより、美術という方がいいのかもしれないけれど、それまでは全く自分とは関係のないことでした。絵を描くという行為自体がいやでした。小学校に入るまでは、絵を描くことがすごく好きでした。それが評価の対象になるという感覚よりは、描きたいという意欲が大きかった。でもいつの間にか面白くない存在になっていきました。それで、普通の高校に行って、普通の大学に行って、公務員にでもなるという人生を当たり前に入れていました。

でも、ある時、テレビで信州の山奥で滝に打たれながら家具をつくっているという職人さんのドキュメンタリーを見て、自分も滝に打たれながら何か作りたいと思いました。次の日に、学校に行って中退したいと先生に言いました。すぐにそこに行きたいという話を

しました。すると、担任の先生は世の中にはデザインというものがあって、美大とかでデザインを学ぶことができるんだという話をしました。何とか中退させないように、話をしていました。そのとき初めて、美大とかデザインというものの存在に気づきました。それで、美術の予備校のようなところでデッサンとかを学ぶようになりました。

全然描けなかったんですけど、ある日、『美術手帖』というのを目にしました。コンセプチュアルアートとかから、ニューペインティングの時代になるところだったのですが、そのアーティストが好きというのではなかったのだけれど、皿がばらばらに割れて、それをくっつけた作品があって、それに、絵が描かれていて、大してうまいというわけではないのですが、そのキャプションに、皿・板・「ボンド」・油絵の具って書いてあって、全然結びつかないものなのだと思います。ふと、こんな作品を運ぶのは大変だろうなと思いました。重いだろうし、触ったら怪我もしそうだなと思いました。でも、そのときに自分の中に雷が落ちました。対象物というものに初めて気がつきました。

そこから、こういう仕事をしていました。それまでは、頭の中の学問、ピカソの描いた絵にはどのような意味があるのか、ということをおぼろげに教わっていて、面白くなくなっていたんです。モノというのには自分との関係があって、そこで自分が感じるということがあっていいのではないかということに気づいたときに、自分の考え方がすごく自由になりました。そういう経験がありました。たまたまその本を開いて、そういう体験があったから今に至っています。あの体験がなかったら、アーティストという活動はしていないと思います。働きだすと、どこかに行くというのもなかなか難しくなるので、今のうちに色々なところに行っておきたいと思っています。その中で色々感じて、考えていってほしいと思います。

---

<sup>1</sup> 参加者の肩書き、所属は全て当時のものとする。

<sup>2</sup> NPO 法人 BEPPU PROJECT 代表。

<sup>3</sup> 滋賀県大津市の地名。この文脈では、石山商店街を指す。

<sup>4</sup> P3 art and environment 代表。混浴温泉世界 2009 総合ディレクター。

<sup>5</sup> 静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科 修士課程。

<sup>6</sup> 神戸大学大学院国際文化学研究所 教授。

<sup>7</sup> ニッセイ基礎研究所 主席研究員。

文字起こし担当：林 宏美

編集担当：橋本みなみ